

日本農林漁業振興会会長賞・農林水産大臣賞受賞

有機農業で持続可能な交流・定住を～農は最高の教育資源～

とくていひ え い り かつどうほうじん
受賞者 特定非営利活動法人アグリやさと
(茨城県石岡市)

■ 地域の沿革と概要

茨城県石岡市八郷地区は、茨城県のほぼ中央部に位置し、首都圏からおよそ 70 km 圏内にあり、八溝山系に属する紫峰“筑波山”を頂点に足尾、加波、吾国、難台等の山並みに三方を囲まれた盆地型の地形を形成している。

三方を山に囲まれた盆地のため半分近くが山林で、山の麓の方は傾斜が多く小さな農地から平らで比較的広い農地など、多様な状況で多品目栽培が行われている。また、八郷地区はみかん栽培の北限、リンゴ栽培の南限といわれ、年間を通じて多種の果樹栽培も行われているほか、豚・鶏・牛の畜産も盛んで有畜複合農業が営まれている。

第 1 図 位置図



■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

特定非営利活動法人アグリやさと（以下「アグリやさと」という。）は、石岡市八郷地区において、石岡市が体験型観光施設として廃校を整備した「朝日里山学校」を核とし、自然豊かな里山の環境保全と、都市との交流、有機農業の新規就農者の育成等を通じた豊かで潤いのあるむらづくりに向けた幅広い活動を行っている。

平成元年から JA やさとが多数の農業体験を受入れる中で、JA 職員の負担が課題となっていたため、JA やさとや東都生協等と協議し、都市農村交流を進めていく受け皿として、アグリやさとを平成 20 年 9 月に設立した。

第 1 表 地区の概要

事 項	内 容
地区の規模	旧市町村単位の集団等
組織の性格	機能的な集団等
人口等	総人口 73,061人 総世帯数 28,344戸
農業経営体数 (内訳)	農業経営体数 2,022経営体 個人経営体数 1,997経営体 団体経営体数 25経営体 (内、法人経営体数) 22経営体
農用地の状況 (内訳)	総土地面積 21,553ha 耕地面積 6,270ha 田 3,010ha 畑 3,260ha 耕地率 29.1% 一経営体当たり耕地面積 3.1ha

注：石岡市のデータ

四捨五入のため、計と内訳が一致しない場合がある

主な活動の特徴は、①生産者と消費者の体験交流活動、②新規就農者の育成と有機農業の推進、③活動拠点（旧小学校）を通じた景観の創出、④新規就農者育成による人口の増加、⑤有機農業の理解者、応援団づくりである。

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

ア むらづくりを推進するに至った動機、背景

八郷地区はたばこ生産と養蚕が盛んだったが、昭和 60 年代、国のたばこ減反政策や中国からの絹製品の輸入の増加により養蚕農家が減少していく状況になった。JA やさとでは昭和 51 年から生協へのタマゴの産直をはじめ、生協産直による野菜づくりへ転換する取組を進めており、生協産直を通して消費者を意識した農業に地域ぐるみで取り組む契機となった。

JA やさととは消費者に安心安全を届けるために平成 9 年に有機栽培部会を設立し、有機農業の取組を開始、平成 11 年には新規就農研修農場「ゆめファーム」を設置し、就農を希望する人を対象に、家族単位で 2 年間の研修を行い農家として自立していく仕組みをつくり、新規就農生産者の育成も行ってきた。

しかしながら、JA として年間数多くの農業体験の受入れが行われる中で、受入れを担当する職員の負担が増加するといった状況が生じたことから、農業体験受入れや新規就農者への支援などの事業を、将来的に継続していく観点から、別組織で担っていく必要性が生じた。

イ むらづくりについての合意形成の過程とその内容

農業体験受入れや新規就農者育成支援などを行う新たな組織作りとして、平成 20 年 4 月から、特定非営利活動法人を設立する方向で、石岡市、JA やさと、東都生協などの関係機関で検討を開始した。

上記関係者で、新たな組織の事業内容や体制作りなどについて検討を重ね、平成 20 年 9 月に、アグリやさとが設立された。

ウ 現在に至るまでの経過等

JA やさととして、平成元年度より東都生協組合員親子の稲づくり体験受入れの依頼を受け、年間 8 回の稲づくり体験の受入れを始めた。

平成 12 年からは農協観光の依頼を受け、浦安市立入船中学校の農業体験の受入れ、その後は都会の小中学校・高校生、都会の親子を対象に稲づくりや野菜づくりの農業体験を受入れ、併せて、平成 12 年に、JA 全農主催の首都圏の親子による野菜づくり体験の受入れを開始し、その後も全農協力のもと、稲づくり体験も実施してきた。

平成 16 年に八郷町立朝日小学校が廃校になったことから、平成 18 年に、石岡市と廃校になった小学校の利用について協議した結果、市が食農体験・グリーンツーリズムの拠点としての整備を決定し、平成 19 年～20 年に農山漁村活性化プロジェ

クト支援交付金による設備整備を開始した。

平成 20 年 9 月に、アグリやさとを設立し、ほぼ同時期の平成 20 年 11 月に、旧朝日小学校が体験型観光施設『朝日里山学校』としてオープンした。

平成 22 年 4 月には、指定管理制度によりアグリやさとが『朝日里山学校』の管理運営を開始し、各種体験活動の受入れ拠点となった。

平成 29 年には、石岡市が朝日里山学校周辺に、新規就農研修農場『朝日里山ファーム』を開設したことから、この研修農場の管理運営の委託を受け、農外からの生産者育成事業を開始した。

また、有機野菜による就農だけでなく、朝日里山学校周辺のイチゴの観光農園の減少に対処するため、令和元年にイチゴの研修コースも開設し、2 名が研修を卒業・独立、現在 1 名が研修中である。こうした研修により、朝日里山学校周辺に 15 名程度いた観光イチゴ園が 6 名程度まで減少したが、新規就農者 3 名の増加につながっている。

更に、ぶどうによる新規就農希望者 1 名を、ぶどう農家と連携・協力した育成も実施中で、地区内の生産者が減少する中で、農外からの新規参入者を育成する取組を進めている。



写真 1 朝日里山学校外観

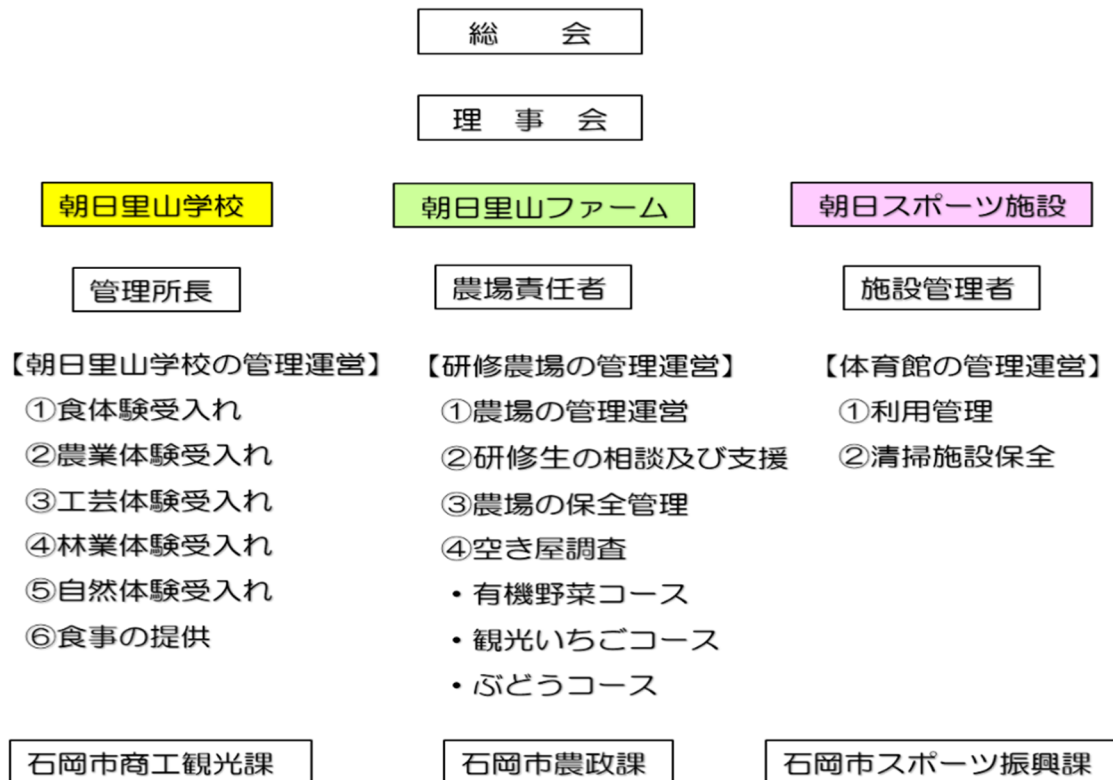
(2) むらづくりの推進体制

ア 当該集団等の組織体制、構成員の状況

法人の正会員は 17 名で、生協産直に携わってきた JA 職員の OB と産直や交流事業を担当している現職の JA 職員、研修農場の卒業者、団体会員として JA やさとと東都生協で構成されており、役員は代表 1 名、副代表 2 名、理事 9 名、監事 2 名となっている。

賛助会員は稲づくり体験に参加している東都生協組合員 9 名。稲づくり体験の参加者への指導や堆肥散布などの農作業を担っている。

第2図 むらづくり推進体制図



イ 当該集団等と連携してむらづくりを行う他の組織、団体及び行政との関係

朝日里山学校の事業に関しては市商工観光課と、朝日里山ファームは市農政課と指定管理や業務委託により連携している。観光事業は市の観光協会と、体験受入れは農協観光・JTBなどの旅行会社と連携し都会の学校の受入れを、また県内の旅行会社と中高校生の受入れを行っている。

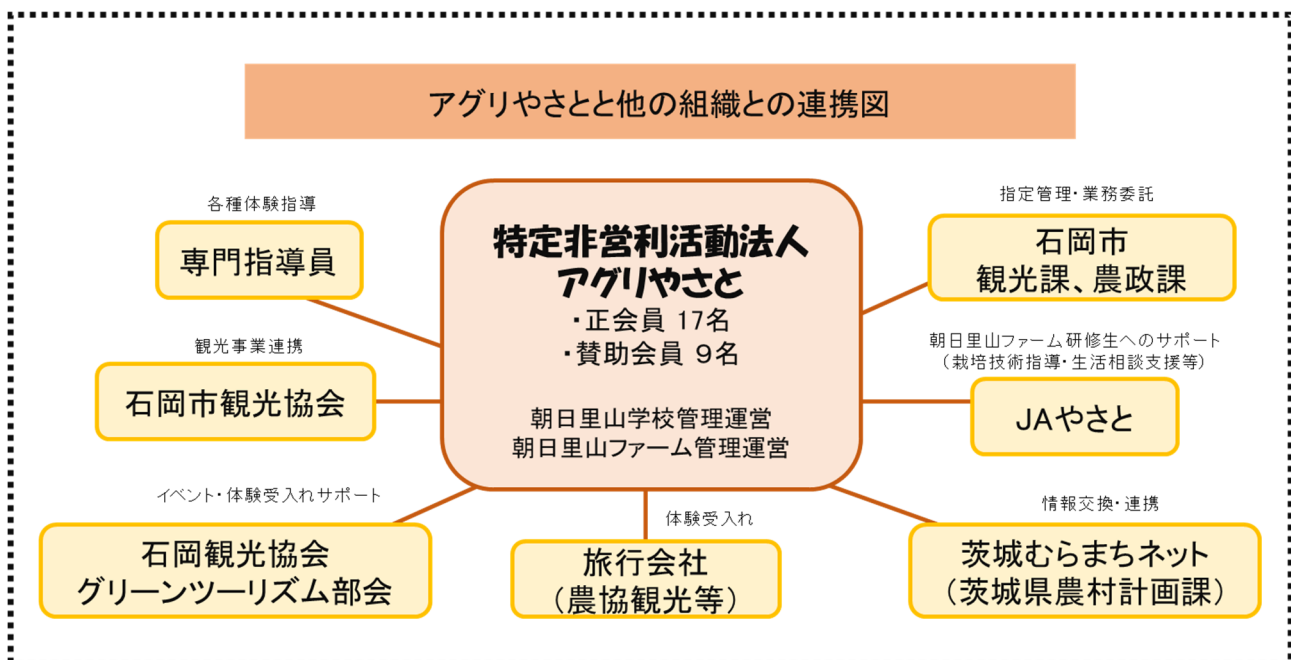
生協組合員親子の稲づくりや野菜づくりの体験は、JA やさとの有機栽培部会生産者や担当職員と協力して体験受入れや生産者と消費者の交流を実施している。

朝日里山ファームは、JA やさと有機栽培部会の生産者の栽培技術の習得や販売の指導研修を連携して行っている。

地域内では石岡観光協会グリーンツーリズム部会や地元住民の支援により活動している。

中学生の林業体験の指導には、来校人数に合わせて地元の方 20 名程度の応援を頂くとともに、朝日里山学校の体験受入れ、そば打ちや陶芸・竹細工の指導やイベントにも、行事に合わせて必要人数の応援を頂いている。

第3図 むらづくり推進体制図（他の組織との連携）



■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

アグリやさとは、法人設立前から JA やさとが中心となり、稲づくり体験や野菜づくり体験といった生産者と消費者の交流活動を実施しており、令和5年度で35年目を迎えている。

都会の中学生の農業体験の受入れなど、年間を通したグリーンツーリズムに関する活動等を実施しており、農業体験の受入れは、33回・約1,800人（平成30年度）から、41回・約3,000人（令和5年度）に増加し、8割が県外からの体験者であり、都市農村交流人口の増加へ大きく貢献している。

また、同法人は、有機農業への新規参入者を受入れ、研修後の地域内で独立する仕組みづくりや空き家調査等を実施するなど、移住を含む新規就農者の受入れ及び定着に向けた支援も行っており、農村地域の活性化に寄与している。

これらの取組により、高齢化による担い手不足や地域の活力低下が懸念される農村地域において、有機農業の推進、持続可能な地域づくりに貢献するなど、総合的なむらづくりが行われている。

2. 農業生産面における特徴

(1) 朝日里山学校での都市農村交流（有機農業の応援団づくり）

朝日里山学校は食体験、農業体験、工芸体験、林業体験などの体験型観光施設となっている。

農業体験では令和5年度は都会からの小学校が2校、中学校が15校、高校が3校、専門学校が1校2回、生協組合員親子が年間14回、その他が5回と1年間で合計41回（約3,000名）の受入れを行っている。特に生協組合員の参加者は親子が多く、子供の教育を目的に

している家族も多くいる。

ア 生協組合員親子の無農薬による稲づくり、

JA やさとと産直を展開している都会の生協組合員親子に農業体験を実施しており、無農薬による稲づくり体験は、田植え、草取り4回、稲刈り、脱穀、収穫祭（お米の配布）と年間8回実施し、取組開始から35年継続している。

野菜づくり体験に来ている親子は、有機農法の種蒔きや苗の植え付け、管理作業、収穫を年3回体験し、有機農業の理解者になっている。

こうした体験活動には、有機栽培部会の生産者も一緒に作業に参加し、交流を図っている。

大豆づくり、野菜づくり



写真2 無農薬による稲づくり田植え体験

イ 都会（東京・千葉等）の中学生等の農林業体験

都会の中学生の田植えや稲刈り・山に入つての間伐の農林業体験、畑でジャガイモや人参、玉ねぎを収穫し薪でカレーや飯盒炊飯をする食事の体験提供など、年間多くの体験活動を受入れており、参加者は800名（平成30年）から2,200名（令和5年）と約3倍に増加し、特に東京都杉並区や千葉県浦安市など県外からの参加校が多数になっている。

また、林業体験には、地元のベテラン指導者が積極的に参加し交流も図られている。



写真3 中学生の林業体験

ウ ピザづくり、うどんづくり等の食体験

一般来訪者へのサツマイモやジャガイモ、大根、人参などの野菜の収穫体験受入れ、そば打ちやピザづくり・ジャムづくり・味噌造りなどの食体験、竹細工や木工・陶芸などの工芸体験、中学生受入れ時の弁当、田舎のバイキングやバーベキューなどの食の提供など、令和6年度は11,000名程度の来訪者を受入れている。

さらに、当該施設は、テレビや映画のロケ地としても使用されている。



写真4 人気のピザづくり体験

(2) 有機農業の新規就農者育成

市が整備した朝日里山ファームの管理運営を担い、有機農業への参入を希望する生産者を年に1家族受入れ、2年間の研修を経て地域内で独立する支援を行い、これまで5家族を育成し、JA やさと有機栽培部会の生産者となっている。

JA が運営するゆめファーム卒業生も含め、有機栽培部会員32名（令和5年度）中26名

が新規参入農家で、地元農家は6名で構成されるなど、朝日里山ファームは有機農家の育成に貢献している。

また、有機栽培部会は30歳代が多く移住してくるともあり、部員の平均年齢が若く販売額も毎年増加し、地域内で一番元気のある組織になっている。独立するとJA出荷ばかりでなく、地元のスーパーや直売所にも販売する方もいる。

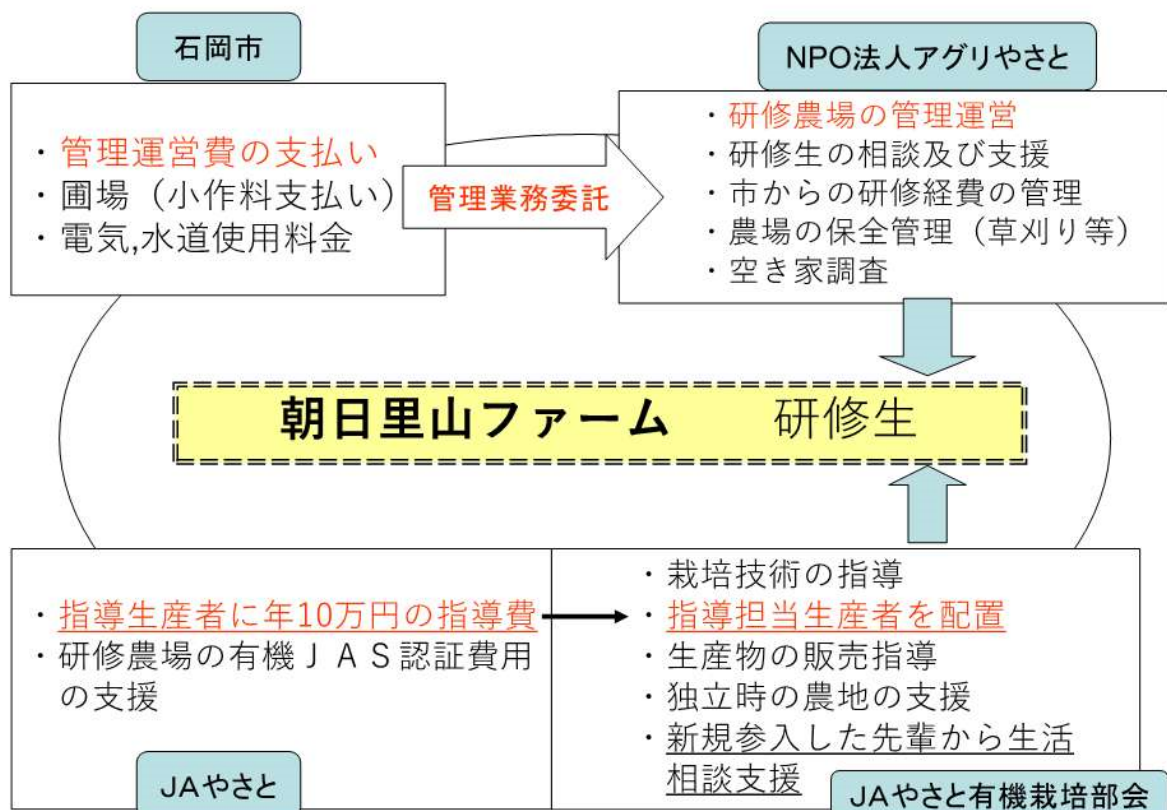
ゆめファームと朝日里山ファームを合わせると、移住者は家族も含め100数十名にもなり、農家が減少し遊休農地の増加と、人口減少が進んでいる石岡市の中にあって、農業による移住という良い関係を生み出している。このようなJAの有機農業の取り組みにより、石岡市八郷地区は日本で有数の有機農業者が多い地域になっている。

市の有機農業の支援に当たっては、研修農場により有機農家を増やしていく役割を担うほか、学校給食で有機野菜を利用するなど、有機農業を推進しており、今後、市では「オーガニックビレッジ宣言」も検討している。



写真5 朝日里山ファームの有機農業
研修卒業生

第4図 朝日里山ファームの関係機関の役割、運営図



3. 生活・環境整備面における特徴

(1) 活動拠点（旧小学校）を通じた景観の創出

廃校になった朝日小学校が朝日里山学校として利用されていることは、地元住民にとっても特別な役割を果たしている。地元の農家から借りた田や畑での農業体験や、借りた山での間伐体験が提供できるなど、地元住民との密接な連携によって体験活動を円滑に実施できている。

朝日里山ファームの開設に当たっては、遊休農地を整備して研修生の研修農場や体験交流活動で使用する農場としたことにより、美しい農村風景へと生まれ変わり、現在は、水田、畑、山々がおりなす、すばらしい景観を形成しており、来訪者に感動を与えている。

(2) 新規就農者育成による人口の増加

朝日里山ファーム及びゆめファームによる新規就農者の育成により、移住者は家族も含め 100 数十名にもなるなど、遊休農地の増加と、人口減少が進んでいる石岡市の中にあって、農業による移住という良い関係を生み出している。

また、有機農業の推進により、石岡市八郷地区は日本で有数の有機農業者が多い地域になっている。

(3) 有機農業の理解者、応援団づくり

令和6年で36年目を迎える生協の稲づくり体験には、東京から親子3代で参加する方もおり、「八郷は第2のふるさと」と言っている。

また、20年以上前から稲づくり体験に参加している夫婦の方は、八郷地区に家を建て、平日は東京で働きながら、週末には八郷で過ごして野菜づくりを行うなど、二地域居住を行っている。

生協組合員の親子で参加している方は、有機の作り方で種蒔きや苗の植え付け、管理作業、収穫まで年3回の体験活動を通して、有機農業の良き理解者、応援団になっている。



写真6 東都生協の稲づくり体験